

# 源氏物語

## 夕顔卷

与謝野晶子訳





源氏物語

夕顔

紫式部

與謝野晶子訳

うき夜半よはの悪夢と共になつかしきゆめ  
もあとなく消えにけるかな　（晶子）

源氏が六条に恋人を持っていたころ、御所からそこへ通う途中で、  
だいぶ重い病気をし尼になった大貳だいにの乳母めのとを訪ねようとして、五条辺  
のその家へ来た。乗ったまま車を入れる大門がしめてあったので、

従者に呼び出させた乳母の息子むすこの惟光これみつの来るまで、源氏はりっぱでないその辺の町を車からながめていた。惟光の家の隣に、新しい檜垣ひがきを外囲いにして、建物の前のほうは上げ格子こうしを四、五間ずっと上げ渡した高窓式になっていて、新しく白い簾すだれを掛け、そこからは若いきれいな感じのする額を並べて、何人かの女が外をのぞいている家があった。高い窓に顔が当たっているその人たちは非常に背の高いもののように思われてならない。どんな身分の者の集まっている所だろう。風変わりな家だと源氏には思われた。今日は車も簡素なのにして目だたせない用意がしてあって、前駆の者にも人払いの声を立てさせなかったから、源氏は自分のだれであるかに町の人も気はつくまいという気楽な心持ちで、その家を少し深くのぞこうとした。門の戸も蔀風しとみふうに

なっていて上げられてある下から家の全部が見えるほどの簡単なものである。哀れに思ったが、ただ仮の世の相であるから宮も藁屋わらやも同じことという歌が思われて、われわれの住居すまいだって一所いっしょだとも思えた。端隠しのような物に青々とした蔓草つるくさが勢いよくかかっていて、その白い花だけがその辺で見る何よりもうれしそうな顔で笑っていた。そこに白く咲いているのは何の花かという歌を口ずさんでいると、中將の源氏につけられた近衛このえの隨身ずいしんが車の前に膝ひざをかがめて言った。「あの白い花を夕顔と申します。人間のような名でございまして、こうした卑しい家の垣根かきねに咲くものでございます」

その言葉どおりで、貧しげな小家がちのこの通りのあちら、こちら、あるものは倒れそうになった家の軒などにもこの花が咲いてい

た。

「気の毒な運命の花だね。一枝折ってこい」

と源氏が言うと、しとみふう 葎風の門のある中へはいつて隨身は花を折った。

ちよつとしゃれた作りになっている横戸の口に、黄色の生絹すずしの袴はかまを長めにはいた愛らしい童女が出て来て隨身を招いて、白い扇を色のつくほど薰物たきもので燻くゆらしたのを渡した。

「これへ載せておあげなさいまし。手で提さげては不恰ぶかつこう好な花ですもの」

隨身は、夕顔の花をちようどこの時門をあけさせて出て来た惟光の手から源氏へ渡してもらった。

「鍵かぎの置き所がわかりませんでして、たいへん失礼をいたしました。

よいも悪いも見分けられない人の住む界わいではございまして、見苦しい通りにお待たせいたしまして」

と惟光は恐縮していた。車を引き入れさせて源氏の乳母めのとの家へ下りた。惟光の兄の阿闍梨あじやり、乳母の婿の三河守みかわのかみ、娘などが皆このごろはここに来ていて、こんなふうには源氏自身で見舞いに来てくれたことを非常にありがたがっていた。尼も起き上がっていた。

「もう私は死んでもよいと見られる人間なんでございますが、少しこの世に未練を持っておりましたのはこうしてあなた様にお目にかかるということがあの世ではできませんからでございます。尼になりました功德くどくで病気が楽になりました、こうしてあなた様の御前へも出られたのですから、もうこれで阿弥陀あみだ様のお迎えも快くお待ちすることが

できるでしょう」

などと言つて弱々しく泣いた。

「長い間恢復かいふくしないあなたの病気を心配しているうちに、こんなふう  
に尼になつてしまわれたから残念です。長生きをして私の出世する時  
を見てください。そのあとで死ねば九品蓮台くほんれんだいの最上位にだつて生まれ  
ることができるよう。この世に少しでも飽き足りない心を残すの  
はよくないということだから」

源氏は涙ぐんで言つていた。欠点のある人でも、乳母というような  
関係でその人を愛している者には、それが非常にりっぱな完全なもの  
に見えるのであるから、まして養君やしないぎみがこの世のだれよりもすぐれた源  
氏の君であつては、自身までも普通の者でないような誇りを覚えてい



る彼女であつたから、源氏からこんな言葉を聞いてはただうれし泣きをするばかりであつた。息子や娘は母の態度を飽き足りない齒がゆいもののように思つて、尼になつていながらこの世への未練をお見せするようなものである、俗縁のあつた方に惜しんで泣いていただくのはともかくもだがというような意味を、肱ひじを突いたり、目くばせをしたりして兄弟どうしで示し合つていた。源氏は乳母を憐あわれんでいた。

「母や祖母を早く失くした私のために、世話する役人などは多数にあつても、私の最も親しく思われた人はあなただつたのだ。大人になつてからは少年時代のように、いつもいつしよにしていることができず、思い立つ時にすぐに訪ねて来るようなこともできないのですが、今でもまだあなたと長く逢あわなないでいると心細い気がするほどなんだ

から、生死の別れというものがなければよいと昔の人が言ったようなことを私も思う」

しみじみと話して、袖そでで涙を拭ふいている美しい源氏を見ては、この方の乳母でありえたわが母もよい前生ぜんしやうの縁を持った人に違いないという気がして、さつきから批難がましくしていた兄弟たちも、しんみりとした同情を母へ持つようになった。源氏が引き受けて、もつと祈きとう祷を頼むことなどを命じてから、帰ろうとする時に惟光これみつに蠟燭ろうそくを点ともさせて、さつき夕顔の花の載せられて来た扇を見た。よく使い込んであつて、よい薰物たきものの香のする扇に、きれいな字で歌が書かれてある。

心あてにそれかとぞ見る白露の光添へたる夕顔の花

散らし書きの字が上品に見えた。少し意外だった源氏は、風流遊戯をしかけた女性に好感を覚えた。惟光に、

「この隣の家にはだれが住んでいるのか、聞いたことがあるか」と言うと、惟光は主人の例の好色癖が出てきたと思った。

「この五、六日母の家におりますが、病人の世話をしておりますので、隣のことはまだ聞いておりません」

惟光<sup>これみつ</sup>が冷淡に答えると、源氏は、

「こんなことを聞いたのでおもしろく思わないんだね。でもこの扇が私の興味をひくのだ。この辺のことに詳しい人を呼んで聞いてもらん」

と言った。はいって行って隣の番人と逢って来た惟光は、

「地方庁の介すけの名だけをいただいている人の家でございました。主人は田舎いなかへ行っているそうで、若い風流好きな細君がいて、女房勤めをしているその姉妹たちがよく出入りすると申します。詳しいことは下げに人で、よくわからないのでございましょう」

と報告した。ではその女房をしているという女たちなのであらうと源氏は解釈して、いい気になって、物馴ものなれた戯れをしかけたものだと思ひ、下の品であらうが、自分を光源氏と見て詠よんだ歌をよこされたのに対して、何か言わねばならぬという気がした。というのは女性にはほだされやすい性格だからである。ふところがみ懷紙に、別人のような字体で書いた。

寄りてこそそれかとも見め黄昏れたそがにほのぼの見つる花の夕顔

花を折りに行つた隨身に持たせてやった。夕顔の花の家の人源氏を知らなかったが、隣の家的主人筋らしい貴人はそれらしく思われて贈つた歌に、返事のないのにきまり悪さを感じていたところへ、わざわざ使いに返歌を持たせてよこされたので、またこれに対して何か言わねばならぬなどと皆で言い合つたであらうが、身分をわきまえないしかただと反感を持っていた隨身は、渡す物を渡したただけですぐに歸つて来た。

前駆の者が馬上で掲げて行く松明たいまつの明りがほのかにしか光らないで源氏の車は行つた。高窓はもう戸がおろしてあつた。その隙間すきまから螢ほたる

以上にかすかな灯ひの光が見えた。

源氏の恋人の六条貴女きじよの邸やしきは大きかった。広い美しい庭があつて、家の中は気高けだかく上じようず手に住み馴ならしてあつた。まだまったく源氏の物とも思わせない、打ち解けぬ貴女を扱うのに心を奪われて、もう源氏は夕顔の花を思い出す余裕を持っていなかつたのである。早朝の歸りが少しおくれて、日のさしそめたころに出かける源氏の姿には、世間から大騒ぎされるだけの美は十分に備わっていた。

今朝けさも五条しとみふうの蔀風の門の前を通つた。以前からの通り路みちではあるが、あのちよつとしたことに興味を持つてからは、行き来のたびにその家が源氏の目についた。幾日かして惟光が出て来た。

「病人がまだひどく衰弱しているものでございますから、どうしても

そのほうの手が離せませんで、失礼いたしました」

こんな挨拶あいさつをしたあとで、少し源氏の君の近くへ膝ひざを進めて惟光朝これみつあ

臣そんは言つた。

「お話がございましたあとで、隣のことによく通じております者を呼び寄せまして、聞かせたのでございますが、よくは話さないのでございます。この五月ごろからそつと来て同居している人があるようですよ。が、どなたなのか、家の者にもわからせないようにしていますと申すのです。時々私の家との間の垣根かきねから私はのぞいて見るのですが、いかにもあの家には若い女の人たちがいるらしい影が簾すだれから見えます。

主人がいなければつけない裳もを言いわけほどにでも女たちがつけておりますから、主人である女が一人いるに違いございません。昨日夕日きのう

がすっかり家の中へさし込んでいました時に、すわって手紙を書いて  
いる女の顔が非常にきれいでした。物思いがあるふうでございました  
よ。女房の中には泣いている者も確かにありました」

源氏はほほえんでいたが、もっと詳しく知りたいと思うふうであ  
る。自重をなさらない身分は身分でも、この若さと、こ  
の美の備わった方が、恋愛に興味をお持ちにならないでは、第三者が  
見ている物足らないことである。恋愛をする資格がないように思わ  
れているわれわれでさえもずいぶん女のことでは好奇心が動くのであ  
るからとこれみつ惟光は主人をながめていた。

「そんなことから隣の家の内の秘密がわからないものでもないと思ひ  
まして、ちよつとした機会をとらえて隣の女へ手紙をやってみまし



た。するとすぐに書き馴<sup>な</sup>れた達者な字で返事がまいりました、相当に  
よい若い女房もいるらしいのです」

「おまえは、なおどしどし恋の手紙を送つてやるのだね。それがよい。その人の正体が知れないではなんだか安心ができない」

と源氏が言った。家は下<sup>げ</sup>の下<sup>げ</sup>に属するものと品<sup>しな</sup>定め<sup>さだ</sup>の人たちに言われるはずの所でも、そんな所から意外な趣のある女を見つけ出すことがあればうれしいに違いないと源氏は思うのである。

源氏は空蟬<sup>うつせみ</sup>の極端な冷淡さをこの世の女の心とは思われないと考え  
ると、あの女が言うままになる女であつたなら、氣の毒な過失をさせた  
ということだけで、もう過去へ葬つてしまつたかもしれないが、強い  
態度を取り続けられるために、負けたくないと反抗心が起こるので

あるとこんなふうに使われて、その人を忘れている時は少ないのである。これまでは空蟬うつせみ階級の女が源氏の心を引くようなこともなかったが、あの雨夜の品定めを聞いて以来好奇心はあらゆるものに動いて行つた。何の疑いも持たずに一夜の男を思っているもう一人の女を憐あわれまないのではないが、冷静にしている空蟬にそれが知れるのを、恥ずかしく思つて、いよいよ望みのないことのわかる日まではと思つてそれきりにしてあるのであつたが、そこへ伊予介いよのすけが上京して来た。そして真先まっさきに源氏の所へ伺候した。長い旅をして来たせいで、色が黒くなりやつれた伊予の長官は見栄みえも何もなかった。しかし家柄もいいものであつたし、顔だちなどに老いてもなお整つたところがあつて、どこか上品なところのある地方官とは見えた。任地の話などをしだすの

で、湯の郡の温泉話こおりも聞きたい気はあったが、何ゆえとなしにこの人を見るときまりが悪くなつて、源氏の心に浮かんでくることは数々の罪の思い出であつた。まじめな生一本きいっぽんの男と対むかつていて、やましい暗い心を抱くとはけしからぬことである。人妻に恋をして三角関係を作る男の愚かさを左馬頭さまのかみの言つたのは真理であると思うと、源氏は自分に対して空蟬の冷淡なのは恨めしいが、この良人おととのためには尊敬すべき態度であると思うようになった。

伊予介が娘を結婚させて、今度は細君を同伴して行くという噂うわさは、二つとも源氏が無関心で聞いていられないことだった。恋人が遠国へつれられて行くと聞いては、再会を気長に待つていられなくなつて、もう一度だけ逢あうことはできぬかと、小君こぎみを味方にして空蟬に接近す

る策を講じたが、そんな機会を作るということは相手の女も同じ目的を持っている場合だつても困難なのであるのに、空蟬のほうでは源氏と恋をすることの不似合いを、思い過ぎるほどに思っていたのであるから、この上罪を重ねようとはしないのであつて、とうてい源氏の思うようにはならないのである。空蟬はそれでも自分が全然源氏から忘れられるのも非常に悲しいことだと思つて、おりおりの手紙の返事などに優しい心を見せていた。なんでもなく書く簡単な文字の中に可憐かれんな心が混じつていたり、芸術的な文章を書いたりして源氏の心を惹ひくものがあつたから、冷淡な恨めしい人であつて、しかも忘れられない女になっていた。もう一人の女は他人と結婚をしても思いどおりに動かしうる女だと思つていたから、いろいろな噂を聞いても源氏は何と

も思わなかった。秋になった。このごろの源氏はある発展を遂げた初恋のその続きの苦悶くもんの中にいて、自然左大臣家へ通うことも途絶えがちになって恨めしがられていた。六条の貴女きじよとの関係も、その恋を得る以前ほどの熱をまた持つことのできない悩みがあつた。自分の態度によつて女の名譽が傷つくことになつてはならないと思うが、夢中になるほどその人の恋しかつた心と今の心とは、多少懸隔へだたりのあるものだった。六条の貴女はあまりにものを思い込む性質だった。源氏よりは八歳上やっつの二十五であつたから、不似合いな相手と恋に墮おちて、すぐにまた愛されぬ物思いに沈む運命なのだろうか、待ち明かしてしまふ夜などには煩悶はんもんすることが多かつた。

霧の濃くおりた朝、歸りをそそのかさされて、睡ねむそうなふうで歎息たんそく

をしながら源氏が出て行くのを、貴女の女房の中将が格子こうしを一間だけ上げて、女主人おんなあるじに見送らせるために几帳きちようを横へ引いてしまった。それで貴女は頭を上げて外をながめていた。いろいろに咲いた植え込みの花に心が引かれるようで、立ち止まりがちに源氏は歩いて行く。非常に美しい。廊のほうへ行くのに中将が供をして行つた。この時節えんにふさわしい淡紫うすむらさきの薄物の裳もをきれいに結びつけた中将の腰つきが艶えんであつた。源氏は振り返つて曲がり角かどの高欄の所へしばらく中将を引き据すえた。なお主従の礼をくずさない態度も額髪ひたいがみのかかりぎわのあざやかさもすぐれて優美な中将だつた。

「咲く花に移るてふ名はつつめども折らで過ぎうき今朝けさの朝顔

どうすればいい」

こう言つて源氏は女の手を取った。物馴ものなれたふうで、すぐに、

朝霧の晴れ間も待たぬけしきにて花に心をとめぬとぞ見る

と言う。源氏の焦点をはずして主人の侍女としての挨拶をしたのである。美しい童侍わらわざむらいの恰好かっこうのよい姿をした子が、指貫さしぬきの袴はかまを露ぬで濡らしながら、草花の中へはいつて行つて朝顔の花を持って来たりもするのである、この秋の庭は絵にしたいほどの趣があつた。源氏を遠くから知っているほどの人でもその美を敬愛しない者はない、情趣を解しない山の男でも、休み場所には桜の蔭かげを選ぶようなわけで、その身分身

分によつて愛している娘を源氏の女房にさせたいと思つたり、相当な女であると思う妹を持った兄が、ぜひ源氏の出入りする家の召使にさせたいとか皆思つた。まして何かの場合には優しい言葉を源氏からかけられる女房、この中將のような女はおろそかにこの幸福を思つていない。情人になろうなどとは思ひも寄らぬことで、女主人の所へ毎日おいでになればどんなにうれしいであらうと思つていたのであつた。

それから、あの惟光<sup>これみつ</sup>の受け持ちの五条の女の家を探る件、それについて惟光はいろいろな材料を得てきた。

「まだだれであるかは私にわからない人でございます。隠れていることの知れないようにとずいぶん苦心する様子です。閑暇<sup>ひま</sup>なものですから、南のほうの高い窓のある建物のほうへ行つて、車の音がすると若



い女房などは外をのぞくようですが、その主人らしい人も時にはそちらへ行っていることがございます。その人は、よくは見ませんがずいぶん美人らしいようです。この間先払いの声を立てさせて通る車がございましたが、それをのぞいて女の童めわらわが後ろの建物のほうへ来て、『右近うこんさん、早くのぞいてごらんなさい、中将さんが通りをいらっしゃいます』と言いますと相当な女房が出て来まして、『まあ静かななさいよ』と手でおさえるようにしながら、『まあどうしてそれがわかったの、私がのぞいて見ましょう』と言って前の家のほうへ行くのですね、細い渡り板が通路なんですから、急いで行く人は着物の裾すそを引っかけ倒れたりして、橋から落ちそうになって、『まあいやだ』などと大騒ぎで、もうのぞきに出る気もなくなりそうなんです

ね。車の人は直衣姿で、隨身たちもおりました。だれだれも、だれだ

れもと数えている名は頭中将とうのちゆうじようの隨身や少年侍の名でございました」

などと言った。

「確かにその車の主が知りたいものだ」

もしかすればそれは頭中将が忘られないように話した常夏とこなつの歌の女ではないかと思つた源氏の、もしよく探りたいらしい顔色を見た惟これ光みつは、

「われわれ仲間の恋と見せかけておきまして、実はその上に御主人のいらつしやることもこちらは承知しているのですが、女房相手の安価やっこな恋の奴になりすましております。向こうでは上手じようずに隠せていると思いまして私が訪ねて行つてゐる時などに、女の童わらわなどがうっかり言葉を

すべらしたりいたしますと、いろいろに言い紛らしまして、自分たちだけだというふうを作ろうといたします」

と言つて笑つた。

「おまえの所へ尼さんを見舞いに行つた時に隣をのぞかせてくれ」

と源氏は言つていた。たとえ仮住まいであつてもあの五条の家にいる人なのだから、下の品の女であろうが、そうした中におもしろい女が発見できればと思うのである。源氏の機嫌きげんを取ろうと一所懸命の惟光であつたし、彼自身も好色者で他の恋愛にさえも興味を持つほうであつたから、いろいろと苦心をした末に源氏を隣の女の所へ通わせるようにした。

女のだれであるかをぜひ知ろうともしないとともに、源氏は自身の

名もあらわさずに、思いきり質素なふうをして多くは車にも乗らずに通った。深く愛しておらねばできぬことだと惟光は解釈して、自身の乗る馬に源氏を乗せて、自身は徒歩で供をした。

「私から申し込みを受けたあすこの女はこの態<sup>てい</sup>を見たら驚くでしょう」

などとこぼしてみせたりしたが、このほかには最初夕顔の花を折りに行った隨身と、それから源氏の召使であるともあまり顔を知られていない小侍だけを供にして行つた。それから知れることになつてはとの氣づかいから、隣の家へ寄るようなこともしない。女のほうでも不思議でならない気がした。手紙の使いが来るとそつと人をつけてやつたり、男の夜明けの帰りに道を窺<sup>うかが</sup>わせたりしても、先方は心得ていて

それらをはぐらかしてしまった。しかも源氏の心は十分に惹<sup>ひ</sup>かれて、一時的な関係にとどめられる気はしなかった。これを不名誉だと思う自尊心に悩みながらしばしば五条通いをした。恋愛問題ではまじめな人も過失をしがちなものであるが、この人だけはこれまで女のことと世間の批難を招くようなことをしなかったのに、夕顔の花に傾倒してしまった心だけは別だった。別れ行く間も昼の間もその人をかたわらに見がたい苦痛を強く感じた。源氏は自身で、氣違いじみたことだ、それほどの価値がどこにある恋人かなどと反省もしてみるのである。驚くほど柔らかかでおおような性質で、深味のあるような人でもない。若々しい一方の女であるが、処女であつたわけでもない。貴婦人ではないようである。どこがそんなに自分を惹きつけるのであろうと不思議

議でならなかった。わざわざ平生の源氏に用のない狩衣かりぎぬなどを着て変装した源氏は顔なども全然見せない。ずっと更ふけてから、人の寝静まったあとで行ったり、夜のうちに帰ったりするのであるから、女のほうでは昔の三輪みわの神の話のような気がして気味悪く思われないではなかった。しかしどんな人であるかは手の触覚からでもわかるものであるから、若い風流男以外な者に源氏を観察くわんさつしていない。やはり好色な隣の五位ごいが導いて来た人に違ちがいと惟光これみつを疑っているが、その人はまったく気がつかぬふうで相変わらず女房の所へ手紙を送って来たり、訪たずねて来たりするので、どうしたことかと女のほうでも普通の恋の物思おもいとは違ちがった煩悶はんもんをしていた。源氏もこんなに眞実を隠し続ければ、自分も女のだれであるかを知りようがない、今の家が仮すまいの住居

であることは間違いないことらしいから、どこかへ移って行ってしまった時に、自分は呆然とするばかりであろう。行くえを失つてもあきらめがすぐつくものならよいが、それは断然不可能である。世間をはばかつて間を空ける夜などは堪えられない苦痛を覚えるのだと源氏は思つて、世間へはだれとも知らせないで二条の院へ迎えよう、それを悪く言われても自分はそうなる前生の因縁だと思ふほかはない、自分ながらもこれほど女に心を惹かれた経験が過去にないことを思うと、どうしても約束事と解釈するのが至当である、こんなふうに源氏は思つて、

「あなたもその気におなりなさい。私は気楽な家へあなたをつれて行って夫婦生活がしたい」こんなことを女に言い出した。

「でもまだあなたは私を普通には取り扱っていらっしやらない方なんですから不安で」

若々しく夕顔が言う。源氏は微笑された。

「そう、どちらかが狐きつねなんだろうね。でも欺だまされていらっしやればいいじゃない」

なつかしいふうに源氏が言うと、女はその気になっていく。どんな欠点があるにしても、これほど純な女を愛せずにはいられないではないかと思つた時、源氏は初めからその疑いを持っていたが、頭中將とうのちゅうじょうの常夏とこなつの女はいよいよこの人らしいという考えが浮かんだ。しかし隠しているのはわけのあることであろうからと思つて、しいて聞く気にはなれなかった。感情を害した時などに突然そむいて行つてしまうよう



な性格はなさそうである、自分が途絶えがちになったりした時には、あるいはそんな態度に出るかもしれぬが、自分ながら少し今の情熱が緩和された時にかえって女のよさがわかるのではないかと、それを望んでもできないのだから途絶えの起こってくるわけではない、したがって女の気持ちを不安に思う必要はないのだと知っていた。

八月の十五夜であつた。明るい月光が板屋根の隙間<sup>すきま</sup>だらけの家の中へさし込んで、狭い家の中の物が源氏の目に珍しく見えた。もう夜明けに近い時刻なのであろう。近所の家々で貧しい男たちが目をさまして高声で話すのが聞こえた。

「ああ寒い。今年<sup>ことし</sup>こそもう商売のうまくいく自信が持てなくなつた。地方廻りもできそうでないんだから心細いものだ。北隣さん、まあお

聞きなさい」

などと言っているのである。哀れなその日その日の仕事のために起き出して、そろそろ労働を始める音なども近い所でするのを女は恥ずかしがっていた。氣どった女であれば死ぬほどもきまりの悪さを感じる場所に違いない。でも夕顔はおおようにしていた。人の恨めしさも、自分の悲しさも、体面の保たれぬきまり悪さも、できるだけ思ったとは見せまいとするふうで、自分自身は貴族の子らしく、娘らしくて、ひどい近所の会話の内容もわからぬようであるのが、恥じ入られたりするよりも感じがよかった。ごほごほと雷以上の恐いこわ音をさせる唐臼からうすなども、すぐ寢床のそばで鳴るように聞こえた。源氏もやかましいとこれは思った。けれどもこの貴公子も何から起こる音とは知らないの

である。大きなたまらぬ音響のする何かだと思っていた。そのほかにもまだ多くの騒がしい雑音が聞こえた。白い麻布を打つ砧きぬたのかすかな音もあちこちにした。空を行く雁かりの声もした。秋の悲哀がしみじみと感じられる。庭に近い室であつたから、横の引き戸を開けて二人で外をながめるのであつた。小さい庭にしゃれた姿の竹が立っていて、草の上の露はこんなところのも二条の院の前栽せんざいのに変わらずきらきらと光っている。虫もたくさん鳴いていた。壁の中で鳴くといわれて人間の居場所に最も近く鳴くものになっている蟋蟀こおろぎでさえも源氏は遠くの声だけしか聞いていなかったが、ここではどの虫も耳のそばへとまつて鳴くような風変わりの情趣だと源氏が思うのも、夕顔を深く愛する心が何事も悪くは思わせないのであろう。白い袷あわせに柔らかい淡紫うすむらさきを重

ねたはなやかな姿ではない、ほっそりとした人で、どこかきわだつて非常によいところはないが繊細な感じのする美人で、ものを言う様子に弱々しい可憐かれんさが十分にあつた。才氣らしいものを少しこの人に添えたらと源氏は批評的に見ながらも、もっと深くこの人を知りたい気がして、

「さあ出かけましょう。この近くのある家へ行つて、気楽に明日あすまで話しましょう。こんなふうでいつも暗い間に別れていかなければならないのは苦しいから」

と言うと、

「どうしてそんなに急なことをお言い出しになりますの」

おおように夕顔は言っていた。変わらぬ恋を死後の世界にまで続け

ようと源氏の誓うのを見ると何の疑念もはさまずに信じてよろこぶ様子などのうぶさは、一度結婚した経験のある女とは思えないほど可憐であつた。源氏はもうだれの思わくもはばかる気がなくなつて、右近うこんに随身を呼ばせて、車を庭へ入れることを命じた。夕顔の女房たちも、この通う男が女主人を深く愛していることを知っていたから、だれともわからずにいながら相当に信頼していた。

ずっと明け方近くなつてきた。この家に鶏とりの声は聞こえないで、現世利益りやくの御岳教みたけきょうの信心なのか、老人らしい声で、起たつたりすわつたりして、とても忙しく苦しそうにして祈る声が聞かれた。源氏は身にしむように思つて、朝露と同じように短い命を持つ人間が、この世に何の慾よくを持って祈祷きとうなどをするのだらうと聞いているうちに、

「南<sup>なむ</sup>無<sup>む</sup>当<sup>たう</sup>来<sup>らい</sup>の導師<sup>だうし</sup>」

と阿<sup>あ</sup>弥<sup>み</sup>陀<sup>だ</sup>如<sup>にょ</sup>来<sup>らい</sup>を呼<sup>よ</sup>びか<sup>け</sup>け<sup>た</sup>。

「そら聞<sup>き</sup>いてご<sup>ご</sup>らん。現<sup>げん</sup>世<sup>せ</sup>利<sup>り</sup>益<sup>ぎ</sup>だ<sup>だけ</sup>が目<sup>め</sup>的<sup>てき</sup>じ<sup>じ</sup>やな<sup>な</sup>か<sup>か</sup>つ<sup>つ</sup>た」  
とほ<sup>ほ</sup>め<sup>め</sup>て、

優<sup>う</sup>婆<sup>ば</sup>塞<sup>そく</sup>が行<sup>い</sup>な<sup>な</sup>ふ道<sup>どう</sup>をし<sup>し</sup>る<sup>る</sup>べ<sup>べ</sup>に<sup>に</sup>て来<sup>き</sup>ん世<sup>せ</sup>も深<sup>ふか</sup>き契<sup>け</sup>り<sup>り</sup>た<sup>た</sup>がふ<sup>ふ</sup>な

とも言<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>た。玄<sup>げん</sup>宗<sup>そう</sup>と楊<sup>よう</sup>貴<sup>き</sup>妃<sup>ひ</sup>の七<sup>しち</sup>月<sup>げつ</sup>七<sup>しち</sup>日<sup>にち</sup>の長<sup>ちやう</sup>生<sup>せい</sup>殿<sup>でん</sup>の誓<sup>ちか</sup>いは実<sup>じつ</sup>現<sup>げん</sup>され<sup>れ</sup>な  
い空<sup>くう</sup>想<sup>そう</sup>であ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>が、五<sup>ご</sup>十<sup>じゅう</sup>六<sup>りく</sup>億<sup>いっ</sup>七<sup>しち</sup>千<sup>せん</sup>万<sup>まん</sup>年<sup>ねん</sup>後<sup>ご</sup>の弥<sup>み</sup>勒<sup>ろく</sup>菩<sup>ぼ</sup>薩<sup>さつ</sup>出<sup>しゅつ</sup>現<sup>げん</sup>の世<sup>よ</sup>ま<sup>ま</sup>で<sup>で</sup>も変<sup>へん</sup>  
わ<sup>わ</sup>らぬ誓<sup>ちか</sup>いを源<sup>げん</sup>氏<sup>し</sup>はし<sup>し</sup>た<sup>た</sup>のであ<sup>あ</sup>る。

前の世の契り知らるる身のうさに行く末かけて頼みがたさよ

と女は言つた。歌を詠む才なども豊富であらうとは思われない。月夜に出れば月に誘惑されて行つて帰らないことがあるということをも思つて出かけるのを躊躇する夕顔に、源氏はいろいろに言つて同行を勧めているうちに月もはいつてしまつて東の空の白む秋のしのめが始まつてきた。

人目を引かぬ間にと思つて源氏は出かけるのを急いだ。女のからだを源氏が軽々と抱いて車に乗せ右近が同乗したのであつた。五条に近い帝室の後院である某院へ着いた。呼び出した院の預かり役の出て来るまで留めてある車から、忍ぶ草の生い茂つた門の廂が見上げられ

た。たくさんにある大木が暗さを作っているのである。霧も深く降っていて空気の湿しめっぽいのに車の簾すだれを上げさせてあつたから源氏の袖そでもそのうちべったりと濡ぬれてしまった。

「私にははじめての経験だが妙に不安なものだ。

いにしへもかくやは人の惑ひけんわがまだしらぬしののめの道

前にこんなことがありましたか」

と聞かれて女は恥ずかしそうだった。

「山の端はの心も知らず行く月は上うはの空にて影や消えなん



心細うございます、私は」

凄<sup>すご</sup>さに女がおびえてもいるように見えるのを、源氏はあの小さい家におおぜい住んでいた人なのだから道理であると思っておかしかった。

門内へ車を入れさせて、西の対<sup>たい</sup>に仕度<sup>したく</sup>をさせている間、高欄に車の柄を引つけて源氏らは庭にいた。右近は艶<sup>えん</sup>な情趣を味わいながら女主人の過去の恋愛時代のある場面なども思い出されるのであった。預かり役がみずから出てする客人の扱いが丁寧きわまるものであることから、右近にはこの風流男の何者であるかがわかった。物の形がほのぼの見えるころに家へはいった。にわかな仕度ではあったが体裁よく座敷がこしらえてあった。

「だれというほどの人がお供しておらないなどとは、どうもいやはや」

などといって預かり役は始終出入りする源氏の下家司しもけいしでもあつたから、座敷の近くへ来て右近に、

「御家司をどなたかお呼び寄せしたものでございましょうか」と取り次がせた。

「わざわざだれにもわからない場所にここを選んだのだから、おまえ以外の者にはすべて秘密にしておいてくれ」

と源氏は口留めをした。さつそくに調えられた粥かゆなどが出た。給仕も食器も間に合わせを忍ぶよりほかはない。こんな経験を持たぬ源氏は、一切を切り放して気にかけぬこととして、恋人とはばからず語り

合う愉樂に酔おうとした。

源氏は昼ごろに起きて格子を自身で上げた。非常に荒れていて、人影などとは見えずにはるばると遠くまでが見渡される。向こうのほうの木立ちは気味悪く古い大木に皆なっていた。近い植え込みの草や灌木などには美しい姿もない。秋の荒野の景色になっている。池も水草でうずめられた<sup>すこ</sup>凄<sup>すこ</sup>いものである。別れた棟<sup>むね</sup>のほうに部屋<sup>へや</sup>などを持って預かり役は住むらしいが、そこそことはよほど離れている。

「気味悪い家になっている。でも鬼なんかだって私だけはどうともしなからう」

と源氏は言った。まだこの時までは顔を隠していたが、この態度を女が恨めしがっているのを知って、何たる錯誤だ、不都合なのは自分

である、こんなに愛していながらと気がついた。

「夕露にひもとく花は玉鉾たまぼこのたよりに見えし縁えにこそありけれ

あなたの心あてにそれかと思うと言った時の人の顔を近くに見て幻滅げつめつが起こりませんか」

と言う源氏の君を後目しりめに女は見上げて、

光ありと見し夕顔のうは露は黄昏時たそがれどきのそら目なりけり

と言った。冗談じょうだんまでも言う気になったのが源氏にはうれしかった。

打ち解けた瞬間から源氏の美はあたりに放散した。古くさく荒れた家との対照はまして魅惑的だった。

「いつまでも真実のことを打ちあけてくれないのが恨めしくって、私もだれであるかを隠し通したのだが、負けた。もういいでしょう、名を言ってください、人間離れがあまりしすぎます」

と源氏が言っても、

「家も何もない女ですもの」

と言つてそこまではまだ打ち解けぬ様子も美しく感ぜられた。

「しかたがない。私が悪いのだから」

と怨<sup>うら</sup>んでみたり、永久の恋の誓いをし合ったりして時を送った。

惟光<sup>これみつ</sup>が源氏の居所を突きとめてきて、用意してきた菓子などを座敷

へ持たせてよこした。これまで白しらばくれていた態度を右近うこんに恨まれるのがつらくて、近い所へは顔を見せない。惟光は源氏が人騒がせに居所を不明にして、一日を犠牲にするまで熱心になりうる相手の女は、それに価する者であるらしいと想像をして、当然自己のものになしうるはずの人を主君にゆずった自分は広量なものだと嫉妬しつとに似た心で自嘲ようもし、羨望せんぼうもしていた。

静かな静かな夕方の空をながめていて、奥のほうは暗くて気味が悪いと夕顔が思うふうなので、縁の簾すだれを上げて夕映ゆうばえの雲をいっしょに見て、女も源氏とただ二人で暮らしえた一日に、まだまったく落ち着かぬ恋の境地とはいえ、過去に知らない満足が得られたらしく、少しずつ打ち解けた様子が可憐かれんであつた。じつと源氏のそばへ寄つて、こ

の場所がこわくてならぬふうであるのがいかにも若々しい。格子こうしを早くおろして灯ひをつけさせてからも、

「私のほうにはもう何も秘密が残っていないのに、あなたはまだそうでないのだからいけない」

などと源氏は恨みを言っていた。陛下はきつと今日も自分をお召しになったに違いないが、捜す人たちはどう見当をつけてどこへ行っているだろう、などと想像をしながらも、これほどまでにこの女を溺愛できあいしている自分を源氏は不思議に思った。六条の貴女きじよもどんなに煩悶はんもんをしていることだろう、恨まれるのは苦しいが恨むのは道理であると、恋人のことはこんな時にもまず気にかかった。無邪気に男を信じていっしょにいる女に愛を感じるとともに、あまりにまで高い自尊心に

みずから煩わされている六条の貴女が思われて、少しその点を取り捨てたならと、眼前の人に比べて源氏は思うのであった。

十時過ぎに少し寝入った源氏は枕まくらの所に美しい女がすわっているのを見た。

「私がどんなにあなたを愛しているかしないのに、私を愛さないで、こんな平凡な人をつれていらっしって愛撫あいぶなさるのはあまりにひどい。恨めしい方」

と言つて横にいる女に手をかけて起こそうとする。こんな光景を見た。苦しい襲われた気持ちになつて、すぐ起きると、その時に灯ひが消えた。不気味なので、太刀たちを引き抜いて枕もとに置いて、それから右近を起こした。右近も恐ろしくてならぬというふうで近くへ出て来



た。

「渡殿わたどのにいる宿直とのいの人を起こして、蝋燭ろうそくをつけて来るように言うがい  
い」

「どうしてそんな所へまで参れるものでございますか、暗くろうて」

「子供らしいじゃないか」

笑つて源氏が手をたたくとそれが反響になつた。限りない気味悪さである。しかもその音を聞きつけて来る者はだれもない。夕顔は非常にこわがつてふるえていて、どうすればいいだろうと思うふうである。汗をずつぷりとかいて、意識のありなしも疑わしい。

「非常に物恐れをなさいます御性質ですから、どんなお気持ちかなさるのでございましょうか」

と右近も言った。弱々しい人で今日の昼間も部屋へやの中を見まわすことができずに空をばかりながめていたのであるからと思うと、源氏はかわいそうでならなかった。

「私が行って人を起こそう。手をたたくと山彦やまびこがしてうるさくてならない。しばらくの間ここへ寄っていてくれ」

と言って、右近を寢床のほうへ引き寄せておいて、両側の妻戸の口へ出て、戸を押しあけたのと同時に渡殿についていた灯も消えた。風が少し吹いている。こんな夜に侍者は少なく、しかもありたけの人は寝てしまっていた。院の預かり役の息子むすこで、平生源氏が手もとで使っていた若い男、それから侍童が一人、例の隨身とのおい、それだけが宿直とくのいをしていたのである。源氏が呼ぶと返辞をして起きて来た。

「蠟燭ろうそくをつけて参れ。隨身に弓の絃打つるうちをして絶えず声を出して魔性に備えるように命じてくれ。こんな寂しい所で安心をして寝ていていいわけではない。先刻せんこく惟光これみつが来たと言っていたが、どうしたか」

「参っておりますが、御用事もないから、夜明けにお迎えに参ると申して帰りましてございます」

こう源氏と問答をしたのは、御所の滝口に勤めている男であつたから、専門家的に弓絃ゆづるを鳴らして、

「火危あぶなし、火危し」

と言いながら、父である預かり役の住居すまいのほうへ行つた。源氏はこの時刻の御所を思った。殿上てんじょうの宿直役人が姓名を奏上する名対面はもう終わっているだろう、滝口の武士の宿直の奏上があるころである

と、こんなことを思ったところをみると、まだそう深更でなかったに  
違いない。寢室へ帰って、暗がりの中を手で探ると夕顔はもとのまま  
の姿で寝ていて、右近がそのそばでうつ伏せになっていた。

「どうしたのだ。氣違いじみたこわがりようだ。こんな荒れた家など  
というものは、狐きつねなどが人をおどしてこわがらせるのだよ。私がおれ  
ばそんなものにおどかされはしないよ」

と言って、源氏は右近を引き起こした。

「とても気持ちが悪うございますので下を向いておりました。奥様は  
どんなお気持ちでいらっしゃいますことでしょうか」

「そうだ、なぜこんなにばかりして」

と言って、手で探ると夕顔は息もしていない。動かしてみてもなよ

なよとして氣を失っているふうであつたから、若々しい弱い人であつたから、何かの物怪もののけにこうされているのであらうと思つと、源氏は歎たん息そくされるばかりであつた。蠟燭ろうそくの明りが來た。右近には立つて行くだけの力がありそうもないので、閨ねやに近い几帳きちようを引き寄せてから、  
「もつとこちらへ持つて來い」

と源氏は言つた。主君の寢室の中へはいるというまつたくそんな不謹慎な行動をしたことがない滝口は座敷の上段になつた所へもよう來ない。

「もつと近くへ持つて來ないか。どんなことも場所によることだ」

灯ひを近くへ取つて見ると、この閨の枕の近くに源氏が夢で見たとおりの容貌ようぼうをした女が見えて、そしてずっと消えてしまつた。昔の小説

などにはこんなことも書いてあるが、実際にあるとは思うと源氏は恐ろしくてならないが、恋人はどうなったかという不安が先に立つて、自身がどうされるだろうかという恐れはそれほどなくて横へ寝て、

「ちよいと」

と言って不気味な眠りからさませようとするが、夕顔のからだは冷えはてていて、息はまったく絶えているのである。頼りにできる相談相手もない。坊様などはこんな時の力になるものであるがそんな人もむろんここにはいない。右近に対して強がって何かと言った源氏であつたが、若いこの人は、恋人の死んだのを見ると分別も何もなくなつて、じつと抱いて、

「あなた。生きてください。悲しい目を私に見せないで」

と言っていたが、恋人のからだはますます冷たくて、すでに人ではなく遺骸いがいであるという感じが強くなつていく。右近はもう恐怖心も消えて夕顔の死を知って非常に泣く。紫宸殿ししんでんに出て来た鬼は貞信公ていしんこうを威嚇いかくしたが、その人の威に押されて逃げた例などを思い出して、源氏は  
しいて強くなろうとした。

「それでもこのまま死んでしまうことはないだろう。夜というものは  
声を大きく響かせるから、そんなに泣かないで」

と源氏は右近に注意しながらも、恋人との歓会がたちまちにこう  
なったことを思うと呆然ぼうぜんとなるばかりであつた。滝口を呼んで、

「ここに、急に何かに襲われた人があつて、苦しんでいるから、すぐ

これみつあそん

に惟光朝臣の泊まっている家に行つて、早く来るように言えとだれかに命じてくれ。兄の阿闍梨あじやりがそこに来ているのだつたら、それもいつしよに来るようにと惟光に言わせるのだ。母親の尼さんなどが聞いて気にかけるから、たいそうには言わせないように。あれは私の忍び歩きなどをやかましく言つて止める人だ」

こんなふうに順序を立ててものを言いながらも、胸は詰まるように、恋人を死なせることの悲しさがたまらないものに思われるのといつしよに、あたりの不気味さがひしひしと感ぜられるのであつた。もう夜中過ぎになつてゐるらしい。風がさつきより強くなつてきて、それに鳴る松の枝の音は、それらの大木に深く囲まれた寂しく古い院であることを思わせ、一風変わった鳥がかれ声で鳴き出すのを、梟ふくろうと



はこれであろうかと思われた。考えてみるとどこへも遠く離れて人声  
もしないこんな寂しい所へなぜ自分は泊まりに来たのであらうと、源  
氏は後悔の念もしきりに起こる。右近は夢中になつて夕顔のそばへ寄  
り、このまま慄<sup>ふる</sup>え死にをするのでないかと思われた。それがまた心配  
で、源氏是一所懸命に右近をつかまえていた。一人は死に、一人はこ  
うした正体もないふうで、自身一人だけが普通の人間なのであると思  
うと源氏はたまらない気がした。灯<sup>ひ</sup>はほのかに瞬<sup>またた</sup>いて、中央の室との  
仕切りの所に立てた屏風<sup>びょうぶ</sup>の上とか、室の中の隅々<sup>すみずみ</sup>とか、暗いところの  
見えるここへ、後ろからひしひしと足音をさせて何かが寄つて来る気  
がしてならない、惟光が早く来てくれればよいとばかり源氏は思つ  
た。彼は泊まり歩く家を幾軒も持った男であつたから、使いはあちら

こちらと尋ねまわっているうちに夜がぼつぼつ明けてきた。この間の長さは千夜にもあたるように源氏には思われたのである。やっとはるかな所で鳴く鶏の声がしてきたのを聞いて、ほっとした源氏は、こんな危険な目にどうして自分はあるのだろう、自分の心ではあるが恋愛についてはもつたいたい、思ふべからざる人を思つた報いに、こんな後にも前にもない例となるようなみじめな目にあるのであろう、隠してもあつた事實はすぐに噂になるであらう、陛下の思召しをはじめとして人が何と批評することだろう、世間の嘲笑が自分の上に集まることであらう、とうとうついにこんなことで自分は名誉を傷つけるのだなと源氏は思っていた。

やつと惟光<sup>これみつ</sup>が出て来た。夜中でも暁でも源氏の意のままに従つて歩

いた男が、今夜に限ってそばにおらず、呼びにやってもすぐの間に合  
わず、時間のおくれたことを源氏は憎みながらも寢室へ呼んだ。孤独  
の悲しみを救う手は惟光にだけあることを源氏は知っている。惟光を  
そばへ呼んだが、自分が今言わねばならぬことがあまりにも悲しいも  
のであることを思うと、急には言葉が出ない。右近は隣家の惟光が来  
た気配に、亡き夫人と源氏との交渉の最初の時から今日までが連続的  
に思い出されて泣いていた。源氏も今までは自身一人が強い人になっ  
て右近を抱きかかえていたのであったが、惟光の来たのにほっとする  
と同時に、はじめて心の底から大きい悲しみが湧き上がってきた。非  
常に泣いたのちに源氏は躊躇しながら言い出した。

「奇怪なことが起こったのだ。驚くという言葉では現わせないような

驚きをさせられた。人のからだにこんな急変があつたりする時には、僧家へ物を贈つて読経どきようをしてもらうものだそうだから、それをさせよう、願を立てさせようと思つて阿闍梨あじやりも来てくれと言つてやったのだが、どうした」

「昨日叡山きのうえいざんへ帰りましたのでございます。まあ何ということでございます。ましよう、奇怪なことでございます。前から少しはおからだが悪かつたのでございますか」

「そんなこともなかった」

と言つて泣く源氏の様子に、惟光も感動させられて、この人までが声を立てて泣き出した。老人はめんどうなものとされているが、こんな場合には、年を取つていて世の中のいろいろな経験を持っている人

が頼もしいのである。源氏も右近も惟光も皆若かった。どう処置をしていいのか手が出ないのであったが、やっと惟光が、

「この院の留守役などに真相を知らせることはよくございません。当人だけは信用ができません、秘密の洩れ<sup>も</sup>やすい家族を持っています。しょうから。ともかくもここを出ていらっしゃいませ」

と言った。

「でもここ以上に人の少ない場所はほかにないじゃないか」

「それはそうでございます。あの五条の家は女房などが悲しがって大騒ぎをするでしょう、多い小家の近所隣へそんな声が聞こえますとたちまち世間へ知れてしまいます、山寺と申すものはこうした死人などを取り扱い馴<sup>な</sup>れておりましようから、人目を紛らすのには都合がよい

ように思われます」

考えるふうだった惟光は、

「昔知っております女房が尼になって住んでいる家が東山にございまして、そこへお移しいたしましょう。私の父の乳母めのとをしております、今は老人としよりになつてゐる者の家でございます。東山ですから人がたぐさん行く所のようにではございますが、そこだけは閑静です」

と言つて、夜と朝の入替わる時刻の明暗の紛れに車を縁側へ寄せさせた。源氏自身が遺骸いがいを車へ載せることは無理らしかったから、莫ご塵みづに巻いて惟光これみつが車へ載せた。小柄な人の死骸からは悪感を受けないで、きわめて美しいものに思われた。残酷に思われるような扱い方を遠慮して、確かにも巻かなんだから、莫塵の横から髪が少しこぼれてい

た。それを見た源氏は目がくらむような悲しみを覚えて煙になる最後まで自分がついていたという気になったのであるが、

「あなた様はさつそく二条の院へお帰りなさいませ。世間の者が起き出しませんうちに」

と惟光は言つて、遺骸には右近を添えて乗せた。自身の馬を源氏に提供して、自身は徒歩で、袴はかまのくくりを上げたりして出かけたのであった。ずいぶん迷惑な役のようにも思われたが、悲しんでいる源氏を見ては、自分のことなどはどうでもよいという気に惟光はなったのである。

源氏は無我夢中で二条の院へ着いた。女房たちが、

「どちらからのお帰りなんでしょう。御気分がお悪いようですよ」

などと言っているのを知っていたが、そのまま寢室へはいって、そして胸をおさえて考えてみると自身が今経験していることは非常な悲しいことであるということがわかった。なぜ自分はあの車に乗って行かなかったのだろう、もし蘇生<sup>そせい</sup>することがあったらあの人はどう思うだろう、見捨てて行ってしまったと恨めしく思わないだろうか、こんなことを思うと胸がせき上がってくるようで、頭も痛く、からだには発熱も感ぜられて苦しい。こうして自分も死んでしまうのであるろうと思われるのである。八時ごろになっても源氏が起きぬので、女房たちは心配をしだして、朝の食事を寢室の主人へ勧めてみたが無駄<sup>むだ</sup>だった。源氏は苦しくて、そして生命<sup>いのち</sup>の危険が迫ってくるような心細さを覚えていると、宮中のお使いが来た。帝<sup>みかど</sup>は昨日<sup>きのう</sup>もお召しになった源氏



を御覧になれなかったことで御心配をあそばされるのであった。左大臣家の子息たちも訪問して来たがそのうちの頭中将とうのちゆうじようにだけ、

「お立ちになったままでちよつとこちらへ」

と言わせて、源氏は招いた友と御簾みすを隔てて対した。

「私の乳母めのとの、この五月ごろから大病をしていました者が、尼になったりなどしたものですから、その効験ききめでか一時快よくなっていました  
が、またこのごろ悪くなりまして、生前にもう一度だけ訪問をしてくれなどと言つてきているので、小さい時から世話になった者に、最後に恨めしく思わせるのは残酷だと思つて、訪問しましたところがその家の召使の男が前から病氣をしていて、私のいるうちに亡なくなつたのです。恐縮して私に隠して夜になってからそつと遺骸を外へ運び出し

たということを私は気がついたので。御所では神事に関した御用の多い時期ですから、そうした穢<sup>けが</sup>れに触れた者は御遠慮すべきであると思つて謹慎をしているのです。それに今朝方<sup>けさがた</sup>からなんだか風邪<sup>かぜ</sup>にかつたのですか、頭痛がして苦しいものですからこんなふうで失礼します」

などと源氏は言うのであつた。中将は、

「ではそのように奏上しておきましょう。昨夜も音楽のありました時に、御自身でお指図<sup>さしず</sup>をなさいましてあちこちとあなたをお捜させになつたのですが、おいでにならなかつたので、御機嫌<sup>ごきげん</sup>がよろしくありませんでした」

と言つて、帰ろうとしたがまた歸つて来て、

「ねえ、どんな穢けがれにおあいになったのですか。さつきから伺ったのはどうもほんとうとは思われない」

と、頭中将から言われた源氏ははつとした。

「今お話したようにこまかにではなく、ただ思いがけぬ穢れにありましたと申し上げてください。こんなので今日は失礼します」

素知らず顔には言っても、心にはまた愛人の死が浮かんできて、源氏は気分も非常に悪くなった。だれの顔も見るのが物憂ものうかつた。お使いの蔵人くらうどの弁べんを呼んで、またこまごまと頭中将に語ったような行触ゆきふれの事情を帝へ取り次いでもらった。左大臣家のほうへもそんなことで行かれぬという手紙が行ったのである。

日が暮れてから惟光これみつが来た。行触ゆきふれの件を発表したので、二条の院

への来訪者は皆庭から取り次ぎをもつて用事を申し入れて帰って行くので、めんどろな人はだれも源氏の居間にいなかった。惟光を見て源氏は、

「どうだった、だめだったか」

と言うと同時に袖を顔へ当てて泣いた。惟光も泣く泣く言う、

「もう確かにお亡れになったのでございます。いつまでお置きしてもよくないことでございますから、それにちようど明日は葬式によい日でしたから、式のことなどを私の尊敬する老僧がありまして、それとよく相談をして頼んでまいりました」

「いっしょに行つた女は」

「それがまたあまりに悲しがりまして、生きていられないというふう

なので、今朝は溪へ飛び込むのではないかと心配されました。五条の家へ使いを出すというのですが、よく落ち着いてからにしなければいけないと申して、とにかく止めてまいりました」

惟光の報告を聞いているうちに、源氏は前よりもいつそう悲しくなつた。

「私も病気になつたようで、死ぬのじゃないかと思う」と言つた。

「そんなふうにまでお悲しみになるのでございますか、よろしくございません。皆運命でございます。どうかして秘密のうちに処置をしたいと思ひまして、私も自身でどんなこともしているのでございますよ」

「そうだ、運命に違いない。私もそう思うが軽率な恋愛漁りから、人を死なせてしまったという責任を感じるのだ。君の妹の少将の命婦な<sup>みようつぶ</sup>どもに言うなよ。尼君なんかはまたいつもああいったふうのことをよくないよこごとくないと小言に言うほうだから、聞かれては恥ずかしくてならない」

「山の坊さんたちにもまるで話を変えてしてございます」

と惟光が言うので源氏は安心したようである。主従がひそひそ話をしているのを見た女房などは、

「どうも不思議ですね、行触れだとお言いになって参内もなさらないし、また何か悲しいことがあるようにあんなふうにして話していらつしやる」

腑<sup>ふ</sup>に落ちぬらしく言っていた。

「葬儀はあまり簡単な見苦しいものにしないほうがよい」

と源氏が惟光<sup>これみつ</sup>に言った。

「それでもごさいません。これは大層<sup>たいそう</sup>にいたしてよいことではごさいません」

と否定してから、惟光が立って行こうとするのを見ると、急にまた源氏は悲しくなった。

「よくないことだとおまえは思うだろうが、私はもう一度遺骸<sup>いがい</sup>を見た  
いのだ。それをしないではいつまでも憂鬱<sup>ゆううつ</sup>が続くように思われるか  
ら、馬でも行こうと思うが」

主人の望みを、とんでもない軽率なことであると思いつながらとも惟光

は止めることができなかった。

「そんなに思召すおぼしめのならしかたがございません。では早くいらつしや  
いまして、夜の更ふけぬうちにお帰りなさいませ」

と惟光は言った。五条通いの変装のために作らせた狩衣かりぎぬに着更きがえな  
どして源氏は出かけたのである。病苦が朝よりも加わったこともわ  
かっていて源氏は、軽はずみにそうした所へ出かけて、そこでまたど  
んな危険が命をおびやかすかもしれない、やめたほうがいいのではな  
いかとも思ったが、やはり死んだ夕顔に引かれる心が強くて、この世  
での顔を遺骸で見ておかなければ今後の世界でそれは見られないので  
あるという思いが心細さをおさえて、例の惟光と隨身を従えて出た。  
非常に路みちのはかがゆかぬ気がした。十七日の月が出てきて、加茂川の



河原を通るころ、前驅の者の持つ松明の淡い明りに鳥辺野のほうが見えるというこんな不気味な景色にも源氏の恐怖心はもう麻痺してしまっていた。ただ悲しみに胸が掻き乱されたふうで目的地に着いた。凄<sup>すこ</sup>い気のする所である。そんな所に住居の板屋があつて、横に御堂が続いているのである。仏前の燈明の影がほのかに戸からすいて見えた。部屋の中には一人の女の泣き声がして、その室の外と思われる所では、僧の二、三人が話しながら声を多く立てぬ念仏をしていた。近くにある東山の寺々の初夜の勤行も終わったところで静かだった。清水の方角にだけ灯がたくさんに見えて多くの参詣人の気配も聞かれるのである。主人の尼の息子の僧が尊い声で経を読むのが聞こえてきた時に、源氏はからだじゅうの涙がことごとく流れて出る気もした。中へ

はいって見ると、灯をあちら向きに置いて、遺骸との間に立てた屏風びょうぶのこちらに右近うこんは横になっていた。どんなに侘わびしい気のすることだろうと源氏は同情して見た。遺骸はまだ恐ろしいという気のしない物であつた。美しい顔をしていて、まだ生きていた時の可憐かれんさと少しも変わっていないかつた。

「私にもう一度、せめて声だけでも聞かせてください。どんな前生の縁だつたかわずかな間の関係であつたが、私はあなたに傾倒した。それなのに私をこの世に捨てて置いて、こんな悲しい目をあなたは見せる」

もう泣き声も惜しまずはばかりぬ源氏だつた。僧たちもだれとはわからぬながら、死者に断ちがたい愛着を持つらしい男の出現を見て、

皆涙をこぼした。源氏は右近に、

「あなたは二条の院へ来なければならぬ」

と言ったのであるが、

「長い間、それは小さい時から片時もお離れしませんでしたとお世話になりました御主人ににわかにお別れいたしましたして、私は生きて帰ろうと思う所がございません。奥様がどうおなりになったかということ、どうほかの人に話ができましたよう。奥様をお亡く<sup>な</sup>しましたほかに、私はまた皆にどう言われるかということも悲しゅうございます」

こう言つて右近は泣きやまない。

「私も奥様の煙といっしょにあの世へ参りとうございます」

「もつともだがしかし、人世とはこんなものだ。別れというものに悲

しくないものはないのだ。どんなことがあっても寿命のある間には死ねないのだよ。気を静めて私を信頼してくれ」

と言う源氏が、また、

「しかしそういう私も、この悲しみでどうなってしまうかわからない」

と言うのであるから心細い。

「もう明け方に近いころだと思われます。早くお帰りにならなければいけません」

惟光これみつがこう促すので、源氏は顧みばかりがされて、胸も悲しみにふさがらせたまま帰途についた。露の多い路みちに厚い朝霧が立っていて、このままこの世でない国へ行くような寂しさが味わわれた。某院の閨ねや

にいたままのふうで夕顔が寝ていたこと、その夜上に掛けて寝た源氏自身の紅の単衣ひとえにまだ巻かれていたこと、などを思つて、全体あの人と自分はどんな前生の因縁があつたのであらうと、こんなことを途々みちみち源氏は思つた。馬をはかばかしく御して行けるふうでもなかったから、惟光が横に添つて行つた。加茂川堤に来てとうとう源氏は落馬したのである。失心したふうで、

「家の中でもないこんな所で自分は死ぬ運命なんだろう。二条の院まではとうてい行けない気がする」

と言つた。惟光の頭も混乱状態にならざるをえない。自分が確しかとした人間だったら、あんなことを源氏がお言いになつても、軽率にこんな案内はしなかつたはずだと思つと悲しかった。川の水で手を洗つて

きよみず

清水の観音を拝みながらも、どんな処置をとるべきだろうと煩悶はんもんした。源氏もしいて自身を励まして、心の中で御仏みほとけを念じ、そして惟光たちの助けも借りて二条の院へ行き着いた。

毎夜続いて不規則な時間の出入りを女房たちが、

「見苦しいことですね、近ごろは平生よりもよく微行おしのびをなさる中でも昨日きのうはたいへんお加減が悪いふうだったでしょう。そんなでおありになつてまたお出かけになつたりなさるのですから、困ったことですね」

こんなふうたんそくに歎息たんそくをしていた。

源氏自身が予言をしたとおりに、それきり床について煩つたのである。重い容体が二、三日続いたあとはまた甚はなはだしい衰弱が見えた。源氏

の病氣を聞こし召した帝も<sup>みかど</sup>非常に御心痛あそばされてあちらでもこちらでも間斷なく<sup>きとう</sup>祈禱が行なわれた。特別な神の祭り、<sup>はら</sup>祓い、<sup>しゅほう</sup>修法などである。何にもすぐれた源氏のような人はあるいは短命で終わるのではないかといって、天下の人がこの病氣に関心を持つようにさえなつた。

病床にいながら源氏は右近を二条の院へ伴わせて、<sup>へや</sup>部屋なども近い所へ与えて、手もとで使う女房の一人にした。<sup>これみつ</sup>惟光は源氏の病の重いことに<sup>てんとう</sup>顛倒するほどの心配をしながら、じつとその気持ちをおさえて、<sup>なじみ</sup>馴染のない女房たちの中へはいった右近のたよりなさそうなのに同情してよく世話をしてやった。源氏の病の少し楽に感ぜられる時などには、右近を呼び出して居間の用などをさせていたから、右近はそ

のうち二条の院の生活に馴<sup>な</sup>れてきた。濃い色の喪服を着た右近は、容<sup>よう</sup>貌<sup>ぼう</sup>などはよくもないが、見苦しくも思われぬ若い女房の一人と見られた。

「運命があの人に授けた短い夫婦の縁から、その片割れの私ももう長くは生きていないのだろう。長い間たよりにしてきた主人に別れたおまえが、さぞ心細いだろうと思うと、せめて私に命があれば、あの人<sup>ひと</sup>の代わりの世話をしたいと思ったこともあったが、私もあの人<sup>ひと</sup>のあとを追うらしいので、おまえには気の毒だね」

と、ほかの者へは聞かせぬ声で言って、弱々しく泣く源氏を見る右近は、女主人に別れた悲しみは別として、源氏にもしまたそんなことがあれば悲しいことだろうと思った。二条の院の男女はだれも静かな



心を失って主人の病を悲しんでいるのである。御所のお使いは雨の脚あしよりもしげく参入した。帝の御心痛が非常なものであることを聞く源氏は、もったいなくて、そのことによって病から脱しようとみずから励むようになった。左大臣も徹底的に世話をした。大臣自身が二条の院を見舞わない日もないのである。そしていろいろな医療や祈禱きとうをしたせいとか、二十日ほど重態だったあとに余病も起こらないで、源氏の病気は次第に回復していくように見えた。行触ゆきふれの遠慮の正規の日数もこの日で終わる夜であったから、源氏は逢あいたく思召おもほしめす帝の御心中を察して、御所の宿直所このいじころにまで出かけた。退出の時は左大臣が自身の車へ乗せて邸やしきへ伴った。病後の人の謹慎のしかたなども大臣がきびしく監督したのである。この世界でない所へ蘇生そせいした人間のように当

分源氏は思った。

九月の二十日ごろに源氏はまったく回復して、瘦<sup>や</sup>せるには痩せたがかえって艶<sup>えん</sup>な趣の添った源氏は、今も思いをよくして、またよく泣いた。その様子に不審を抱く人もあつて、物怪<sup>もののけ</sup>が憑<sup>つ</sup>いているのであらうとも言っていた。源氏は右近を呼び出して、ひまな静かな日の夕方に話をして、

「今でも私にはわからぬ。なぜだれの娘であるということまで私に隠したのだろう。たとえどんな身分でも、私があればどの熱情で思っていたのだから、打ち明けてくれていいわけだと思って恨めしかった」

とも言った。

「そんなにどこまでも隠そうなどとあそばすわけはございません。そうしたお話をなさいます機会がなかったのじゃございませんか。最初があんなふうでございましたから、現実の関係のように思われないとお言いになって、それでもまじめな方ならいつまでもこのふうで進んで行くものでもないから、自分は一時的な対象にされているにすぎないのだとお言いになっては寂しがっていらっしやいました」

右近がこう言う。

「つまらない隠し合いをしたものだ。私の本心ではそんなにまで隠そうとは思っていなかった。ああいった関係は私に経験のないことだったから、ばかに世間がこわかったのだ。御所の御注意もあるし、そのほかいろんな所に遠慮があつてね。ちよつとした恋をしても、それを

大問題のように扱われるうるさい私が、あの夕顔の花の白かった日の夕方から、むやみに私の心はあの人へ惹かれていくようになって、無理な関係を作るようになったのもしばらくしかない二人の縁だったからだと思われる。しかしまた恨めしくも思うよ。こんなに短い縁よりないのなら、あれほどにも私の心を惹いてくれなければよかったからね。まあ今でもよいから詳しく話してくれ、何も隠す必要はなからう。七日七日に仏像を描かせて寺へ納めても、名を知らないではね。それを表に出さないでも、せめて心の中でだれの菩提のためにと思いたいじゃないか」

と源氏が言った。

「お隠しなど決してしようとは思っておりません。ただ御自分のお口

からお言いにならなかったことを、お亡かくれになつてからおしやべりするのには済まないような気がただけでございます。御両親はずっと前にお亡なくなりになつたのでございます。殿様は三位中將さんみでいらつしやいました。非常にかわいがつていらつしやいまして、それにつけても御自身の不遇をもどかしく思召おぼしめしたでしょうが、その上寿命にも恵まれていらつしやいけませんで、お若くしてお亡なくなりになりましたあとで、ちよつとしたことが初めどうのちゆうじようで頭中將がまだ少將でいらつしたところに通つておいでになるようになったのでございます。三年間ほどは御愛情があるふうで御関係が続いていましたが、昨年の秋ごろに、あの方の奥様のお父様の右大臣の所からおどすようなことを言つてまいりましたのを、氣の弱い方でございましたから、むやみに恐ろしがつて

おしまいになりました、西の右京のほうに奥様の乳母めのとが住んでおりました家へ隠れて行っていらっしゃいましたが、その家もかなりひどい家でしたからお困りになって、郊外へ移ろうとお思いいになりましたが、今年は方角が悪いので、方角避けよにあの五条の小さい家へ行っておいでになりましたことから、あなた様がおいでになるようなことになりました、あの家があの家でございますから侘わびしがっておいでになったようでございます。普通の人とはまるで違うほど内気で、物思いをしていると人から見られるだけでも恥ずかしくてならないようにお思いいになりました、どんな苦しいことも寂しいことも心に納めていらしたようでございます」

右近のこの話で源氏は自身の想像が当たったことで満足ができたと

ともに、その優しい人がますます恋しく思われた。

「小さい子を一人行方不明にしたと言つて中将が憂鬱ゆううつになつていたが、そんな小さい人があつたのか」

と問うてみた。

「さようでございます。一昨年の春お生まれになりました。お嬢様で、とてもおかわいらしい方でございます」

「で、その子はどこにいるの、人には私が引き取つたと知らせないようにして私にその子をくれないか。形見も何もなくて寂しくばかり思われるのだから、それが実現できたらいいね」

源氏はこう言つて、また、

「頭中将にもいずれは話をするが、あの人をああした所で死なせてし

まっただのが私だから、当分は恨みを言われるのがつらい。私の従兄いとこの中将の子である点からいっても、私の恋人だった人の子である点からいっても、私の養女にして育てていいわけだから、その西の京の乳母にも何かほかのことにして、お嬢さんを私の所へつれて来てくれないか」

と言った。

「そうになりましたらどんなに結構なことでございます。あの西の京でお育ちになつてはあまりにお気の毒でございます。私ども若い者ばかりでしたから、行き届いたお世話ができないということであつちへお預けになつたのでございます」

と右近は言っていた。静かな夕方の空の色も身にしむ九月だった。



庭の植え込みの草などがうら枯れて、もう虫の声もかすかにしかしなかった。そしてもう少しずつ紅葉の色づいた絵のような景色を右近はながめながら、思いもよらぬ貴族の家の女房になっていることを感じた。五条の夕顔の花の咲きかかった家は思い出すだけでも恥ずかしいのである。竹の中で家鳩いえばとという鳥が調子はずれに鳴くのを聞いて源氏は、あの某院でこの鳥の鳴いた時に夕顔のこわがった顔が今も可憐かれんに思い出されてならない。

「年は幾つだったの、なんだか普通の若い人よりもずっと若いようなふうに見えたのも短命の人だったからだね」

「たしか十九におなりになったのでございましょう。私は奥様のもう一人のほうの乳母の忘れ形見でございましたので、三位さんみ様がかわい

がってくださいまして、お嬢様といっしょに育ててくださいましたものでございます。そんなことを思いますと、あの方のお亡なくなりになりましたあとで、平気でよくも生きているものだと恥ずかしくなるのでございます。弱々しいあの方をただ一人のたよりになる御主人と思つて右近は参りました」

「弱々しい女が私はいちばん好きだ。自分が賢くないせい、あまり聡明そうめいで、人の感情に動かされないような女はいやなものだ。どうかすれば人の誘惑にもかかりそうな人でありながら、さすがに慎つつしましくて恋人になつた男に全生命を任せているというような人が私は好きで、おとなしいそうした人を自分の思うように教えて成長させていければよいと思う」

源氏がこう言うと、

「その好みには遠いように思われません方の、お亡かくれになったことが残念で」

と右近は言いながら泣いていた。空は曇って冷ややかな風が通っていた。

寂しそうに見えた源氏は、

見し人の煙を雲とながむれば夕ゆふべの空もむつまじきかな

と独言ひとりごとのように言っている、返しの歌は言い出されないで、右近は、こんな時に二人そろっておいでになったらという思いで胸の詰ま

る気がした。源氏はうるさかつた砧きぬたの音を思い出してもその夜が恋し

くて、「八月九月正長夜まさにながきよ、千声万声無止時せんせいばんせぬむときなし」と歌っていた。

今も伊予介いよのすけの家の小君こぎみは時々源氏の所へ行つたが、以前のように源

氏から手紙を託されて来るようなことがなかった。自分の冷淡さに懲

りておしまいになつたのかと思つて、空蟬うつせみは心苦しかったが、源氏の

病氣をしていることを聞いた時にはさすがに歎なげかれた。それに良人おととの

任国へ伴われる日が近づいてくるのも心細くて、自分を忘れておしま

いになつたかと試みる気で、

このごろの御様子承り、お案じ申し上げてはおりますが、それを  
私がどうしてお知らせすることができましよう。

問はぬをもなどかと問はで程ふるにいかばかりかは思ひ乱るる

苦しかるらん君よりもわれぞ益田ますだのいける甲斐かひなきという歌が思われます。

こんな手紙を書いた。

思いがけぬあちからの手紙を見て源氏は珍しくもうれしくも思つた。この人と思う熱情も決して醒さめていたのではないのである。

生きがいがないとはだれが言いたい言葉でしょう。

うつせみの世はうきものと知りにしをまた言の葉にかかる命よ

はかないことです。

病後の慄えふるの見える手で乱れ書きをした消息は美しかった。蟬せみの脱ぬけ殻がらが忘れずに歌われてあるのを、女は気の毒にも思い、うれしくも思えた。こんなふう到手紙などでは好意を見せながらも、これより深い交渉に進もうという意思は空蟬になかった。理解のある優しい女であつたという思い出だけは源氏の心に留めておきたいと願っているのである。もう一人の女は蔵人少将くろこうどと結婚したという噂うわさを源氏は聞いた。それはおかしい、処女でない新妻を少将はどう思うだろうと、その良人おっとに同情もされたし、またあの空蟬の継娘ままむすめはどんな気持ちでいるのだろうか、それも知りたさに小君を使いにして手紙を送った。

死ぬほど煩悶はんもんしている私の心はわかりますか。

ほのかにも軒ばの萩をむすばずば露のかごとを何にかけまし

その手紙を枝の長い萩おぎにつけて、そつと見せるようにとは言ったが、源氏の内心では粗相そそうして少将に見つかった時、妻の以前の情人の自分であることを知ったら、その人の気持ちは慰められるであろうという高ぶった考えもあつた。しかし小君は少将の来ていないひまをみて手紙の添った萩の枝を女に見せたのである。恨めしい人ではあるが自分を思い出して情人らしい手紙を送つて来た点では憎くも女は思わなかつた。悪い歌でも早いのが取柄とりえであろうと書いて小君に返事を渡した。

ほのめかす風につけても下荻したをぎ なかばの半は霜にむすぼほれつつ

下手へたであるのを洒落しやれた書き方で紛らしてある字の品の悪いものだった。灯ひの前にいた夜の顔も連想れんそうされるのである。碁盤を中にして  
慎み深く向かい合ったほうの人の姿態にはどんなに悪い顔だちである  
にもせよ、それによつて男の恋の減じるものでないよさがあつた。一  
方は何の深味もなく、自身の若い容貌ようぼうに誇つたふうだつたと源氏は思  
い出して、やはりそれにも心の惹ひかれるのを覚えた。まだ軒端の荻と  
の情事は清算されたものではなさそうである。

源氏は夕顔の四十九日の法要をそつと叡山えいざんの法華堂ほつけどうで行なわせるこ  
とにした。それはかなり大層なもので、上流の家の法会ほうえとしてあるべ



きものは皆用意させたのである。寺へ納める故人の服も新調したし寄進のものも大きかった。書写の経巻にも、新しい仏像の装飾にも費用は惜しまれてなかった。惟光これみつの兄の阿闍梨あじやりは人格者だといわれている僧で、その人が皆引き受けてしたのである。源氏の詩文の師をしている親しい某文章博士もんじょうはかせを呼んで源氏は故人を仏に頼む願文がんもんを書かせた。普通の例と違って故人の名は現わさずに、死んだ愛人を阿弥陀仏あみだぶつにお託しするという意味を、愛のこもった文章で下書きをして源氏は見せた。

「このままで結構でございます。これに筆を入れるところはございません」

博士はこう言った。激情はおさえているがやはり源氏の目からは涙

がこぼれ落ちて堪えがたいように見えた。その博士は、

「何という人なのだろう、そんな方のお亡くなりになったことなど話も聞かないほどの人なのに、源氏の君があんなに悲しまれるほど愛されていた人というのはよほど運のいい人だ」

とのちに言った。作らせた故人の衣裳を源氏は取り寄せて、袴の腰に、

泣く泣くも今日はわが結ふ下紐をいづれの世にか解けて見るべき

と書いた。四十九日の間はなおこの世界にさまよっているという霊魂は、支配者によって未来のどの道へ赴かせられるのであろうと、こ

んなことをいろいろと想像しながら般若心経はんにゃしんぎようの章句を唱えることばかりを源氏はしていた。頭中将に逢あうといつも胸騒ぎがして、あの故人が撫子なでしこにたとえたという子供の近ごろの様子などを知らせてやりたく思ったが、恋人を死なせた恨みを聞くのがつらくて打ちいでにくかった。

あの五条の家では女主人の行くえが知れないのを捜す方法もなかった。右近うこんまでもそれきり便りたよをして来ないことを不思議に思いながら絶えず心配をしていた。確かなことではないが通つて来る人は源氏の君ではないかといわれていたことから、惟光になんらかの消息を得ようとしたが、まったく知らぬふうで、続いて今も女房の所へ恋の手紙が送られるのであったから、人々は絶望を感じて、主人を奪われた

ことを夢のようにばかり思つた。あるいは地方官の息子などの好色男が、頭中將を恐れて、身の上を隠したままで父の任地へでも伴つて行つてしまつたのではないかとついにはこんな想像をするようになった。この家の持ち主は西の京の乳母めのとの娘だつた。乳母の娘は三人で、右近だけが他人であつたから便りを聞かせる親切がないのだと恨んで、そして皆夫人を恋しがつた。右近のほうでは夫人を頓死とんしさせた責任者のように言われるのをつらくも思つていたし、源氏も今になつて故人の情人が自分であつた秘密を人に知らせたくないと思うふうであつたから、そんなことで小さいお嬢さんの消息も聞けないままになつて不本意な月日が両方の間にたつていった。

源氏はせめて夢にでも夕顔を見たいと、長く願つていたが比叡ひえいで法

事をした次の晩、ほのかではあつたが、やはりその人のいた場所は某それがしの院で、源氏が枕もとにすわった姿を見た女もそこに添った夢を見た。このことで、荒廃した家などに住む妖怪が、美しい源氏に恋をしたがために、愛人を取り殺したのであると不思議が解決されたのである。源氏は自身もずいぶん危険だったことを知って恐ろしかった。

伊予介が十月の初めに四国へ立つことになった。いよのすけ細君をつれて行くことになっていたから、普通の場合よりも多くの餞別品せんべつが源氏から贈られた。またそのほかにも秘密な贈り物があった。ついでに空蟬うつせみの脱殻ぬけがらと言った夏の薄衣うすものも返してやった。

逢ふまでの形見ばかりと見しほどにひたすら袖そでの朽ちにけるかな

こまごま

細々しい手紙の内容は省略する。贈り物の使いは帰ってしまったが、そのあとで空蟬は小君こぎみを使いにして小桂こうちぎの返歌だけをした。

蟬の羽もたち変へてける夏ごろもかへすを見ても音ねは泣かれけり

源氏は空蟬を思うと、普通の女性のとりえない態度をとり続けた女ともこれで別れてしまうのだと歎なげかれて、運命の冷たさというようなものが感ぜられた。

きよう 今日から冬の季にはいる日は、いかにもそれらしく、時雨しぐれがこぼれたりして、空の色も身に沁しんだ。終日源氏は物思いをしていて、

過ぎにしも今日別るるも二みちに行く方<sup>かた</sup>知らぬ秋の暮<sup>くれ</sup>かな

などと思っていた。秘密な恋をする者の苦しさが源氏にわかったであらうと思われる。

こうした空蟬とか夕顔とかいうようなはなやかでない女と源氏のした恋の話は、源氏自身が非常に隠していたことがあるからと思つて、最初は書かなかったのであるが、帝王の子だからといって、その恋人までが皆完全に近い女性で、いいことばかりが書かれているのではないかといつて、仮作したもののようになう人があつたから、これらを補つて書いた。なんだか源氏に済まない気がする。





### 「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML (一部は HTML) 形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



---

一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025  
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室  
mail : [issatudo@gmail.com](mailto:issatudo@gmail.com)

---